

令和6年度 学校評価【最終結果】

加賀市立錦城小学校 校長 坂口 明美 印

学校教育ビジョン 「自ら考え、協働できる児童の育成」～みんなが幸せになれる学校をみんなでつくる～										
・目指す児童像	みんなが幸せになるために 协働できる子									
・目指す教師像	児童のグロースマインドセットを高められる教師									
・基本方針	学校教育ビジョンの具現化に向け、①確かな学力の育成 ②豊かな心の育成 ③健やかな体の育成 の取組を組織的な学校運営及び家庭・地域との連携を通して行う。									

評価の項目	今年度の重点目標	具体的な取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	児童一人一人の基礎的な学力をつけるために組織的かつ継続的に推進できる体制づくりを通して、安定的な学力向上のシステムを確立する。	学力向上をめざした持続的な組織体制の強化のために、学校研究との連携を図りながら授業改善を進めるとともに、学力の定着度を図るために取り組む。	授業づくり・学力向上部教務主任	昨年度は基礎・基本の定着を図った。組織的・協働的に各部で取り組み、おむね目標は達成できた。さらに子どもたちの力を伸ばすためにステップアップを図る。	【努力指標】全教職員が学力向上に向けて、「BE THE PLAYERプラン」にそって取り組んでいく。	国語・算数における単元末テストの平均点がA 80%以上である。 B 75%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C・Dの場合は再検討する。毎学期、児童にアンケートを実施する。	A	A	国語・算数における単元末テストの平均点が国語は85.3点、算数は81.9点であった。判定結果はAであるが、算数に限っては、2学年が80点以下の平均点であった。基礎学力の定着を強化していく必要がある。また、思考力・判断力・表現力に限っては、全学年が80点以下である。研究で進めている個別最適な学びとともに、算数の見方・考え方を大切にした協働的な学びの推進も必要であると考える。そのために、話し合いながら学ぶ授業の展開も今後授業の中で取り入れていく必要があると考える。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	子どもたちが毎日充実して生活できる学校を作る。	・全校を巻き込んだ児童会活動の充実を図る。 ・月に1度、教師が児童の良いところを見つけ掲示する「ほめほめweek」を実施し、児童を肯定的に見る取組を行う。 ・字級力アンケートを活用し、学級目標の実現を目指す。 上記の3点を推進することで、いじめの未然防止につなげる。	学びの基盤部生徒指導主任	・前年度の児童会議は、委員会で決定した内容の報告会になっており、トップダウンの流れになっていた。 ・教職員が児童を肯定する雰囲気は一部に留まっていたが、学校全体に広がっていないかった。 ・学級力アンケートの取り組みは前年度同様、継続して行う。	【満足度指標】児童が学校生活を楽しいと感じている。	児童生活アンケートで、「学校が楽しい」「どちらかといえば学校が楽しい」と回答する児童の割合がA 90%以上である。 B 85%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	C・Dの場合は再検討する。毎月、児童にアンケートを実施する。	A	A	児童生活アンケートで、「学校が楽しい」「どちらかといえば学校が楽しい」と回答する児童の割合が94%であった。昨年度より3%増加した要因として、「ほめほめweek」の取組が考えられる。教員に、児童を肯定的に見る習慣が身についたことだと考えられる。否定的回答があった児童に対してても、継続的に児童のがんばりを認める姿勢を意識し、関わっていけるよう、教員全員で取り組んでいかたい。
③キャリア教育・進路指導	働くことや責任を果たすこと、達成感を感じさせたり、仲間と協力する喜びを感じさせたりすることで、自己肯定感を高める。	係活動や委員会では、めあてをもたらせ、さらにために活動を振り返る場を設立することで、責任を果たすことや仲間と協力することの大切さを学ばせる。	児童会担当	前年度アンケート結果より、自ら活動等に参加できていると回答した児童の割合が多くいた。委員会ごとにイベントも充実していた。課題として、他の委員会のイベントに自ら参加する児童が少なかった。	【成果指標】進んで係活動や委員会に参加する児童が増えてきている。	それぞれの活動等に自ら参加できたと感じている児童の割合がA 90%以上である。 B 85%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に児童にアンケートを実施する。	A	A	学年ごとの結果を見ると、「進んで取り組めた」と肯定的に回答した児童の割合は、1年98%、2年88%、3年89%、4年生83%、5年生92%、6年生90%であった。一方で、「進んで取り組めていない」と回答した児童は、全校で8名いた。より進んで参加するよう促すことは継続するが、「取り組めなかつ」と回答した児童には、各学級担任からアプローチしてもらえるよう、働きかけていきたい。また、次年度は学年が上がることで、学校全体の企画に参画する児童も増えることから、より「児童主体」の活動を増やしていきたい。
④保健管理	健やかな成長を促すため、給食において、成長期に必要な食事の量を理解するとともに、適正な量の副菜を食べようとする児童を育成する。	給食において、副菜の適正な量を理解するため、毎食盛りきって配食するよう指導する。また、学年に応じて食指導を行う。	保健主事	昨年度より「盛りきり」を実践したところ、主食主菜については食べきれる回数が増えたが、副菜については残食量が10%を超えることが多い。	【成果指標】副菜について適正な量を食べようとする児童が、増加している。	児童アンケートで「副菜について適正な量を食べようとする回数が増えた」と答える児童の割合がA 80%以上である。 B 75%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に児童にアンケートを実施する。	D	C	全体では肯定的に回答した児童が70%であり、前回より5%上昇した。学年別みると、1年生では15%、2・3・6・6年生は5%、5年生は3%上昇し、4年生が1%減少した。担任による日常の給食指導およびおたより・掲示物での発信が効果があったと考える。しかし、未だ決まった食材や味付けの副菜で、残食率が30%近くになることがある。次年度に向け、家庭への協力が不可欠と考えるので、PTA等の協力を得ながら、副菜について適正な量を食べようとする児童を育てていきたい。
⑤安全管理	教職員は校舎内外の安全管理と安全教育を行い、児童が自分で自分を守ることができる力を育成する。	定期的に教職員による安全点検を行うとともに、学校安全教育計画に基づいた指導や避難訓練時の指導を通じて、安全に気をつけて行動する児童の意識を高める。	教頭	安全点検等の取組により、教職員の安全管理に対する意識は高いが、廊下を走るなど、安全に気をつけて行動できない児童がみられる。	【成果指標】廊下を走らず安全に気をつけて行動できる児童の割合が増えている。	児童アンケートで、「廊下を走らず安全に気をつけて行動できた」と回答する児童の割合がA 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に児童にアンケートを実施する。	C	C	2学期末の児童アンケートでは、肯定的な評価が75%であった。起こりうる危険を考え行動できる児童を育成するために、今後も、引き続き全教職員による声掛けや児童会による取組を行っていく。
⑥特別支援教育	児童一人一人のニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善または克服し「幸せ」を感じられるようになるために適切な指導や必要な支援を行う。	児童のクワーズマインドセットを高めるために、UDLを意識した授業を行うとともに、支援をする児童の困り感に応じた指導を工夫。ICTを活用したUDLを進めている。	特別支援教育コーディネーター	児童の困り感を早期に捉え、気づき票から実態把握している。支援委員会を開き、方針の決定・共通理解をしていった。担任は学年ごとに計画評価し、支援に取り組んでいている。	【満足度指標】児童の困り感のある児童も含めて児童が「やればできると思うことが増えた」と感じている。	UDLの実践、困り感のある児童への特性に応じた支援計画と改善により児童アンケートで「やればできると思うことが増えた」と答えた児童の割合がA 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に児童アンケートを実施する。	A	A	教師が、一人一人の困り感の把握、学びを支える足場づくり、適切な学習環境や支援員配置などに留意し、指導してきたことで、児童の肯定的評価が91%となつたと考えている。計画と改善をしながら、今後も指導・支援に取り組んでいく。
⑦組織運営・業務改善	時間外勤務時間月80時間を超える職員がゼロの業務改善を図る。	運営委員会を中心とした各部会がそれぞれに役割を果たし、チームとしての組織化・協働化された学校運営を図る。	教頭	年度当初、校務分掌によっては時間外勤務がすでに80時間超えの職員がいるが、仕事の標準化、業務の削減など意識している職員は増えている。	【努力指標】月の時間外勤務時間が80時間超の職員が各部会を中心に組織化が推進され、限られた時間内で円滑な学校運営になるよう効率よく取り組んでいる。	月の時間外勤務時間が80時間超の職員がA ゼロ。 B 1割(未満)いる。 C 2割(1割以上2割以内)いる。 D 2割以上いる。	C・Dの場合は再検討する。毎月の勤務時間表で確認する。	B	A	10月には1名が時間外勤務時間が80時間を超えたが、8、9、11月、12月はゼロであることから、改善が見られた。今後も会議の精選や業務のICT化を推進していきたい。
⑧研修	自律した学び手の育成に向けた子どもに委ねる学びの効果的な授業実践を増やす。	研究全体会を定期的に開き、各教諭の実践を交流する中で、より良い実践を研究していく。	授業づくり・学力向上部研究主任若プロ担当	子どもにも委ねる時間が授業の中で増えてきている一方、自分で適した学習を考えられている児童は少ない。	【努力指標】研究全体会、整理会などを通じて話し合ったことを共通理解し、研究主題達成に向けよりよい実践を考えている。	共通理解のもと授業改善にA 十分に取り組んだ B 取り組んだ C どちらかといふと取り組んでいない D 取り組んでいない	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に教職員アンケートを実施する。	B	B	16人の教員を対象にアンケートを実施A:5人、B:10人、C:1人。目指すべき研究の方向性は定期的に伝えてきたため、概ね肯定的回答ではないかと考える。しかし、B回答が多い現状としては、各々の教員の意識の差がある。月1で実践報告をする場を設けるなど、ある程度のノルマを課すことが今後必要である。研究の方向性だけでなく、具体的な実践を紹介することで、各教員からやってみようという意欲を引き出していく。
⑨保護者、地域との連携	家庭・地域との連携を図り、開かれた学校づくりを目指すために学校の様子を発信する。	学校運営協議会やPTAの会合、さらに、授業参観・ホームページ・お便り・連絡メール等を通して、学校教育活動を知らせる。	教頭	ホームページや連絡メールを利用して、地域の方々にも発信できるようにしている。	【満足度指標】保護者アンケートで、「学校の様子がよく伝わっている」と回答した保護者の割合がA 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に保護者アンケートを実施する。	B	C	2学期末の保護者アンケートでは、肯定的な回答の割合が79%であった。加賀市の教育ビジョンを受けた本校の教育方針の異なる周知が必要を感じている。今後、この学びの目的と目標を理解していきたい。	
⑩教育環境整備	学習に必要な教材や学習環境の整備を図る。	学習環境・教材整備に努め、学校予算への関心を高める。	総務部予算委員会	教材・教具の使い方や整理が不十分な状況が見られる。	【満足度指標】教職員アンケートで、「教材・教具の管理と整備整頓ができた。」と回答した割合がA 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C・Dの場合は再検討する。1.2学期末に教職員アンケートを実施する。	A	A	2学期末の教職員アンケートでは、肯定的な回答が95%であった。今後も、教材や教具の管理や整理整頓が継続できるように、声掛けをしていきたい。	

学校関係者評価	・学力の定着について、一定の成果がみられることは喜ばしい。しかし、学年別にみると差がみられる。どの学年においても単元末テストで平均8割はとれるようにしてほしい。また、基礎・基本の確実な定着も図ってほしい。 ・特別な配慮が必要な児童への支援を工夫して行ってほしい。全体の伸びと個の伸びを丁寧に見取り、価値づけることで、達成感を味わわせてほしい。 ・今後も「Be the player」に向けて、先生方の研修観の転換も図りつつ、それが子どもたちの学習観の転換につながるよう、全教職員で尽力してほしい。
---------	--